

19 世紀末イギリスの演劇 *The New Woman* にみる 「新しい女」

—その精神とファッション—

佐々井 啓

(日本女子大学家政学部)

原稿受付平成 18 年 10 月 6 日；原稿受理平成 18 年 12 月 2 日

“The New Woman” Expressed in the Drama *The New Woman* at the End of 19th Century Britain

—Its Spirits and Fashion—

Kei SASAI

Faculty of Home Economics, Japan Women's University, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8681

In late 19th century England, ‘the New Woman’ arises in many literary works and dramas. In this essay, I will explain the features of the New Woman by studying the drama *The New Woman* and examining the reviews and costumes in the magazines *The Sketch* and *The Queen*. Firstly, women who aimed for a new way to live have these features: working, looking for platonic love, not cooking, having a latchkey, living freely and smoking. Secondly, they wore ‘tubular’-looking nether garments, ‘cut-away’ coats and ‘trying hats.’ In this time, there were many tailor-made coats for women like those shows in advertisements of dressmakers. They wore tailor-made costumes because it expressed women’s emancipation. Finally, the New Woman wore attractive dresses which were in vogue. The evening dress of Mrs. Sylvester ornamented with birds expressed a defiant attitude different from traditional attire. The New Woman established her status by her actions and her costume.

(Received October 6, 2006; Accepted in revised form December 2, 2006)

Keywords: the end of 19th century 19 世紀末, England イギリス, the New Woman 新しい女, drama 演劇, stage costume 舞台衣裳.

1. 序

19 世紀後半のイギリスにおいては、典型的な女性像は理想化した良妻賢母型の「家庭の天使」であるといわれている。しかしこの時期には女性の権利を主張する運動がしだいに多くなっていったことも事実である。その背景には、女子の中等及び高等教育の拡大や、女性の数が多くなって結婚できない女性が増えたことなどがあげられる。そしてそのような女性たちから新しい生き方が求められるようになってきたことが指摘されている¹⁾。

さらに 1868 年 3 月 14 日号の『サタデー・レビュー』に掲載された「当世娘 the girl of the period」と題するリントン夫人の評論は、従来の女性像を擁護する

立場から論じられて大きな評判となった。以後、「当世娘」という言葉がさまざまな内容を伴って用いられ、風刺の対象ともなったのである。それは「新しい女」につながる現象であると考えられているので、その一部をとりあげてみたい²⁾。

これまでの理想の女性は、清純で気品があり、厚かましい態度や男性的な心情は持たず、結婚したら夫のライバルではなく、夫の友として安らぎのある家庭を築き、やさしい母、賢い主婦となるものである、という。しかし、当世娘は「髪を染め、化粧をし」、「人生の唯一の理想は快楽と贅沢であり、その衣服は彼女の考えや知性を示すものである。彼女の主な努力は贅沢なファッションで隣人に勝つこと」である、と述べら

れている。

ここでは「当世娘」は、外見的に娼婦のようなドレスを真似ているとし、その風俗がさまざまな角度から批判されている。このような評論が書かれ、それが注目されたことには、これまでのイギリス女性のあるべき姿とはかけ離れた「当世娘」がひとつの風潮として避けられないものとなりつつあった、といえるのではないだろうか。

その後、1883年ごろから女性の新しい生き方を描いた小説が登場し、イギリス文学において一分野をなしている。セアラ・グランドはその作品のなかで「新しい女」をあらわし、それまでさまざまな呼び方がなされていた新しい女性たちを指して、1894年3月に発表された彼女の評論において“the new woman”という言葉を用いた。この名称が特別な意味を持った言葉として定着するのは1894年5月の『ノース・アメリカン・レビュー』に掲載された“The New Woman”と題するウィーダの論からである³⁾。

さらに風刺雑誌である『パンチ』が「新しい女」を取り上げたことによって、ますます「新しい女」が世紀末の現象として取り上げられ、旧式の考えを持つ人々からは批判の対象となったのである。そこで、このような女性を描いた『パンチ』の風刺画をいくつか取り上げてみたい。

まず、1894年4月28日号にドン・キホーテをもじった女性のドンナ・キホーテが描かれている。イプセンやトルストイの本が回りに置かれ、大きな鍵を手に持

ち、背景の旗には“divided skirt”と書かれている。これは明らかに「新しい女」をあらわしており、鍵とディヴァイデッド・スカートがその印であると理解できる⁴⁾ (図1)。

さらに5月26日号には、「新しい女」というタイトルが登場し、セアラ・グランドやウィーダを槍玉に挙げている⁵⁾。また、9月8日号には挿絵のタイトルに「新しい女」が用いられ、猟銃でウサギを射止めた女性性が描かれている⁶⁾ (図2)。そのほかにも「新しい女」の高等教育や家庭での在り方を批判する挿絵もみられ、この時期に「新しい女」がさまざまな面から取り上げられ、風刺の対象となっていたことが窺える。

一方演劇界では、1889年にイプセンの『人形の家』がロンドンで上演され、好評を博した。その影響を受けて、「新しい女」を題材とした戯曲が相次いで登場したのである。1891年に「野蛮な女」、1893年にアーサー・ピネロの「タンカリイ第二夫人」などが上演されている。

そこで、本論では、文学作品からのアプローチを踏まえながら、これまでほとんど言及されていなかった演劇 *The New Woman* を取り上げて登場人物の役割や台詞を分析し、当時のイギリスの新しい女性のさまざまな側面を明らかにしたい。さらに『スケッチ』、『クイーン』などの当時の雑誌の批評や衣裳の記述を検討し、「新しい女」の服飾表現をとりあげるとともに、当時のファッションとの関係を考察する。



図1. 「ドンナ・キホーテ」 *Punch*, April 28, 1894



図2. 「新しい女」 *Punch*, Sept. 8, 1894

19世紀末イギリスの演劇 *The New Woman* にみる「新しい女」2. *The New Woman* にみる新しい女性像(1) *The New Woman* について

The New Woman は、1894年9月1日にロンドンのコメディ劇場で開演された。作者はシドニー・グランディであり、前年に同劇場で前作が上演されている。コミン・カーのマネイジメントによる劇は好評を博した。前述のように、ロンドンでは本作品以外にも「新しい女」をテーマとした演劇が1893年頃から上演されており、本作品がタイトルとして掲げた「新しい女」が注目されていることは明らかである。また、「新しい女」の呼称がこの年に定着したことを考えると、9月に上演された本作品は、その流れのなかで注目すべきものであると思われる。

本作品のあらすじは次のようである⁷⁾。

「新しい女」の代表的な人物シルヴェスター夫人は、若い男性ジェラルド・カザノヴァと共同で『結婚の倫理』という本を出版しようとしている。ジェラルドは部屋を百合の花で飾る女性的な男性であり「新しい女」の理解者として描かれている。またシルヴェスター夫人の友人として、医者メアリー・ベヴァン女史、作家のヴィクトリア・ヴィヴァッシュ嬢、著述家のエニード・ビートン嬢が登場して、「新しい女」の思想や行動を示している。しかしジェラルドは旧思想を代表する叔母のレディ・ウォーグレイヴのメイドをしている幼馴染のマージェリーと結婚をする。しかし、やがてマージェリーに不満を持つようになり、シルヴェスター夫人に愚痴をこぼして、彼女から愛の告白を受けてしまう。そのことを知ったマージェリーに同情したシルヴェスター大尉が彼女に結婚を申し込むが、マージェリーは妻のもとに帰るように諭す。やがて田舎に帰っていたマージェリーを迎えにジェラルドが訪れ、二人は和解して再び共に人生を歩むことになる。

この作品ではシルヴェスター夫人とマージェリーが対立する価値の代表であり、また、新しい女に理解を示すジェラルドと伝統的な男性の象徴としてのシルヴェスター大尉、ジェラルドの叔父のカザノヴァ大佐等との対立が注目される。しかし、結果的には伝統的な女性の立場が勝利を得ることになり、そのタイトルである「新しい女」は風刺の対象として描かれている。すなわち、世相を的確に取り上げて風刺することがこの種の劇にとっては重要であることが明らかである。

『スケッチ』は次のように述べている⁸⁾。

「新しい女」というテーマは、新聞や雑誌で絶えず追い求めているものであり、多くのディナー・

テーブルで話題となっているものである—かなりの哀れみを持って。

また『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』では「*The New Woman* は、グランディ氏のいつもすばらしいドラマティックな会話の中でも最もよい」と評されている⁹⁾。

さらに『レディズ・ピクトリアル』では、「脇役である「新しい女」たち、特にカリカチュアとして描かれた「反抗する」トリオの風刺は、ユーモアの宝庫である」と述べられている¹⁰⁾。

このように、*The New Woman* は、そのテーマ自体はさまざまな評価があったとしても、優れた会話と新しい衣裳によって当時の風俗を巧みに風刺した演劇として注目されていたといえるのではないだろうか。

(2) 新しい女性像

では、本作品に描かれている新しい女性たちの言動を台詞の中から取り上げてみたい。

「新しい女」をあらわす作品や当時の風潮からも明らかなように、女性解放の3つの象徴としてあげられるのは「ドアの鍵 latchkey」、「タバコ」、「自転車」である。本作品では、「ドアの鍵」と「タバコ」がとりあげられており、「自転車」は登場しない¹¹⁾。

まず、「ドアの鍵」についてみていきたい。

自由に出入りできるドアの鍵を持つことは女性の独立を象徴しているものとして「新しい女」たちからは重要視されている¹²⁾。

ヴィクトリア 女性は男性と同じくドアの鍵の権利を持つわ。

エニード でも男性はドアの鍵の権利は持っていないわ。

ヴィクトリア それはばかげたことよ！

(中略)

エニード 女性が男性と同じくミルクと一緒に家に帰る権利を持つことを認めるわ。

ここでは、「ドアの鍵の権利」という言い方をしているが、同時に「ミルクと一緒に家に帰る権利」という表現も出てくる。これはミルクが配達される頃に帰ること、すなわち朝帰りをすることを意味し、ドアの鍵を持っていることにより可能になるのである。

このことは、保守的な男性であるシルヴェスターとカザノヴァ大佐との会話にもあらわれている。シルヴェスターはヴィヴァッシュ嬢の本を手に取りながら、次のように言う¹³⁾。

シルヴェスター 彼女の理論は次のようである、

少女は少年であるべきであり、乙女は青年であるべきだ。ドアの鍵を手に入れる、などだ。(略)

大佐 (略) なぜ女性は女性であることに満足できないのか？ 何のために野蛮な男になりたいがるのか？

シルヴェスター しかし私の妻は女性ではない。

大佐 彼女たちの誰もそうではないさ。ひとりの女性である女性は何ものをも望んではない。彼女たちは彼女たち自身の性であるのさ、シルヴェスター。彼女たちは新しいジェンダーを生み出したのだ。

ここでは「新しい女」たちの主張ではなく、男性側が批判する内容として、「ドアの鍵」について触れている。また、彼女たちの主張は、男性でも女性でもない「新しいジェンダー」を生み出している、という台詞は、当時の保守的な人々の見解を代表しているものであろう。特に、シルヴェスターが自分の妻は「女性ではない」と言っている点は、男性と女性の性役割が当然のこととして語られていることになる。さらに、「私はただシルヴェスター夫人の夫だ」¹⁴⁾という言い方もなされていることは、「新しい女」を妻としながら、その主張を理解していない男性の性格を十分にあらわしているといえよう。

さらに「ドアの鍵」にまつわる台詞として、ヴィクトリア、エニードとマージェリーとの会話がある¹⁵⁾。

ヴィクトリア あなたはすでにドアの鍵を持っているの？

マージェリー ええ、もちろん！

エニード それはショックだわ！

マージェリー そう、あなたは簡単にショックを受けるのね！

ヴィクトリア あなたはドアの鍵を持っているのね？(意気揚々と)

マージェリー (率直に) ええ、私たちはドアの鍵を持っているわ！

二人 (異なった調子で) 私たち？

「新しい女」たちにとって「ドアの鍵」は自由への鍵であるのに対して、マージェリーはまったくそのような意識がなく、「私たち」という言い方をし、夫が遅く帰るときに鍵が必要だから、と説明する。これに対して、「新しい女」たちは大変驚く、という設定になっている。

以上のように、「ドアの鍵」が女性の自立にとって象徴的な意味を持って用いられていたことが理解でき

る。しかし、それは「新しい女」に対する風刺として取り上げられているのである。

次に、タバコについてみていきたい¹⁶⁾。

ヴィクトリア (シガレットケースを取り出す) タバコはおいや？

シルヴェスター ちっとも。私は好きだ。

ヴィクトリア 一緒に吸わない？

マージェリー ありがとう、私は吸わないわ。

ヴィクトリア では一度は試すべきよ。(シガレットを口にくわえる) 火をつけてくださらない？(シルヴェスターはマッチをする) ありがとう。(金の吸い口のあるシガレットの違った方に火をつける)

マージェリー タバコを吸うのは好き？

ヴィクトリア いいえ、主義のために吸うのよ！

シルヴェスター 悪い主義だ！

ヴィクトリア もう一度おっしゃって。男性はシガレットを吸うのよ。

シルヴェスター そうだ、でも男は反対側に火をつける。

(ヴィクトリアはシガレットを口から取り、それを見る。マージェリーとシルヴェスターは爆笑する。ヴィクトリアはタバコを投げ捨てる)

ここは、「新しい女」が男性の真似をしてタバコを吸う場面であるが、シガレットの吸い口を知らずにそこに火をつけてしまう。「主義のため」にタバコを吸うことは、「新しい女」たちがそれを男性と同等の権利と考えていることがわかる。しかし、彼女たちが未熟であることは、タバコの吸い方を知らないという設定に示されているといえよう(図3)。

さらにエニードがヴィクトリアのケースからタバコを取って吸っているときに、カザノヴァ大佐が入ってくる場面がある。エニードは背中にタバコを隠し、握手をするために持ち替えるが、唇をぬぐおうとして火のついたタバコが大佐に見つかってしまう。ここではエニードが大佐に対して好意を持っているために、女性がタバコを吸うことに否定的な男性の前で喫煙を隠そうとしていることが明らかである¹⁷⁾。

それでは、「新しい女」を話題としている場面をとりあげてみたい¹⁸⁾。

大佐 このごろは何でも新しいのだよ！新しい芸術—

エニード 新しいジャーナリズム—

ヴィクトリア 新しい政治経済—

19世紀末イギリスの演劇 *The New Woman* にみる「新しい女」

ベヴァン 新しい道德—

大佐 新しい性！

この会話の続きに、ベヴァン女史がレディ・ウォーグレイヴになにか現代的なことについて反対意見があるかどうかを尋ねると、レディは「新しいことがひとつだけ」と答える。ヴィクトリアは「新しい女ではないでしょう！Not the New Woman!」と言う。会話の中ではすべて「新しい」という言葉が強調されている。ここでは当時の風潮として「新しい」ものが注目されていることを示しているといえよう。

また、3幕の最後にマージェリーがシルヴェスター夫人に向かって「あなたは自分を新しい女と呼ぶのね—あなたはちっとも新しくないわ」と言う場面がある。ここでは、マージェリーはシルヴェスター夫人を、真の男の愛を求める「イヴのような古い女」と責めるのである¹⁹⁾。「新しい女」は男性と自由な関係を持つ側面があることがさまざまな作品で示されているが、その実、「彼女たちは夫を望んでいる」という大佐の台詞に、「新しい女」の現実の一端があらわされている²⁰⁾。

次に、「新しい女」の特徴として、料理をしないことが提示されている²¹⁾。

シルヴェスターが「これから家に帰って夕食をとるつもりだ」と言うと、夫人は次のように答える。

シルヴェスター夫人 おおあなた、そのことを知っていたらよかったのに。マトンしかないわ。

シルヴェスター 同じマトンかい？

シルヴェスター夫人 同じ、とはどういう意味？

シルヴェスター 昨日それを食べたということだ。



図3. 新しい女たち *The Queen*, Sept. 15, 1894

ここでは前日の夕食がマトンであり、妻はふたたびそれを出そうとしていることが述べられている。結局夫はクラブで食事をすることにするが、「新しい女」は料理などの家事を好まないことが風刺されている場面である。またシルヴェスター夫人の台詞の中に「昔は妻は奴隷とみなされていましたが、現代は料理人ですわ」という部分がある。「新しい女」は料理人さえも拒否していることになるのである²²⁾。

以上のように、「新しい女」のさまざまな面が、会話を通して明らかになっている。前述のように、この3人の風刺は豊かなユーモアとなり、この劇を特徴づけている²³⁾といえよう。

3. 登場人物の衣裳

登場人物の衣裳は、当時の他の演劇と同様に専属のドレスメーカーによってデザインされていた。劇場のオーナーがドレスメーカーを選定したと考えられるが、本作品では Mrs. Nettleship が衣裳をデザインしている。そのドレスの詳細は雑誌の記事に説明されており、さらに挿絵や写真からも明らかとなる。そこで、これらの資料から、登場人物の性格と衣裳について検討してみたい²⁴⁾。

(1) マージェリー

1幕では少し堅苦しい「白い衿とカフスのついたヤグルマギクの青いフロックとケープ」に小さなボネットをかぶっている（図4）。この簡素で清純な装いは、マージェリーの役柄をよくあらわしていると思われる。

2幕では、クレープ・デシンの薄いアップルグリー

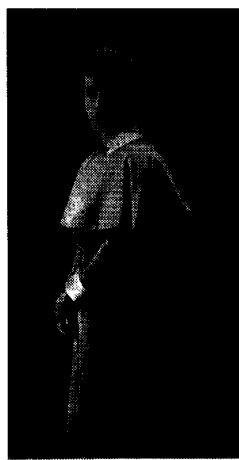


図4. マージェリー
The Sketch, Oct.
17, 1894



図5. マージェリー
Lady's Pictorial,
Sept. 8, 1894

ンのティー・ガウンである。それは、白いレースの衿が首からフィシュのように下がり、ゆったりした袖の肩の部分に広がっている形である。ティー・ガウンは既婚女性のみが着用するものであるため、新婚の女性であることを示唆しているといえよう²⁵⁾ (図5)。

3幕のパーティの場面では、白いサテンのイヴニングドレスである。スローピング・ショルダーの低いボディスがあり、レースのバーサ・カラーが取り巻いている。スカートはトレーンを曳き、「花嫁を暗示して効果的である」と述べられている (図6)。

4幕の田舎のシーンでは、ピンクと白の模様織のモスリンの衣服である。青いボネットを被り、りんごの木の下で収穫を手伝っている田園風景にふさわしい装いである (図7)。

マージェリーは若く、伝統的な価値観のもとに育てられた設定になっており、その衣裳もまた、シンプルで初々しさを強調するようなデザインである。

(2) シルヴェスター夫人

1幕のドレスは、ジェットの装飾のあるグレイのスカートで、ボディスは繊細なピンクの薄絹でゆったりと下がる袖があり、黒いシフォンの裏がついている。上にはしゃれた小さなギピュールレースのジャケットを着ている。全体的な効果は大変良く、疑いもなく新しい、と評されている。

2幕では、モーヴ色（または桃の花色）のクレポンのドレスで、ボディスにはターコイズのシフォンのヴェストを着装している。スカーフがその上に効果的に結ばれている。繊細な黒のレースの衿はスカートの裾にまで落ちていて、流行の装いである (図8)。

3幕のイヴニングドレスはキンポウゲの黄色のシルクであり、ボディスは黄色のシフォンでたっぷりのドレープがある。右肩に大きな鳥がとめられ、スカートにも種々の鳥が飛んでいる (図9)。

シルヴェスター夫人は、マージェリーと対立する女性として位置づけられている。その装いには最も美しい誉め言葉が与えられる、と述べられ、「新しい」姉妹にふさわしい特徴的なドレスである、と評されている。それらは最新流行のデザインであると同時に、奇抜なアイデアが盛り込まれている。



図8. シルヴェスター夫人 *The Sketch*, Sept. 5, 1894



図6. マージェリー
Lady's Pictorial,
Sept. 8, 1894



図7. マージェリー
The Sketch, Oct.
17, 1894



図9. シルヴェスター夫人 *The Queen*, Sept. 15, 1894

19世紀末イギリスの演劇 *The New Woman* にみる「新しい女」

(3) 新しい女たち

新しい女たちの衣裳については、「あまり魅力的でない」と述べられ、とりわけヴィクトリア・ヴィヴァシユは筒状のスカートとカットウェイ・コート、大きな帽子で注目される、という(図3左)。このカットウェイ・コートは裾を斜めに切り落とした形を指し、男性のモーニングコートにその例をみることができるが、この時期には女性のコートに男性のスタイルが取り入れられ、テラーメイドのコートとして登場している。裾の広がらない筒状のスカートとカットウェイ・コートは、まさに男性的な装いであるといえよう。

また、パーティの場面では、小さな花のついた小枝で飾られたピンクのモワレのフロックであるが、ダマスクのバラの縁取りがあるフラウンスがあり、淡黄色のヴェルヴェットの肩紐がついている。このドレスについては「それが愛らしいことを否定するものは何もない」と述べられ、やや皮肉な調子で解説がなされている。

さらに、「強い意志のある女性ドクター」でさえも、愛らしいA夫人の方向に進んでいるかもしれない、といい、次のようなドレスの紹介がある。それは、宝石のついたバックルで結び目がねじられ、クリムゾンのヴェルヴェットの広い帯を引き出しているラズベリーのシフォンの魅力的なイヴニング・ボディスである。この説明は、「新しい女」の主義があるとしても、魅力的なドレスを着装していることに対して、ヴィクトリア同様の批判となっているのではないだろうか。

一方、エニード・ビートンは、3人の中で最も女性的である。彼女は、大佐の前で「ちょうど新しいドレスを注文してきたところよ」²⁶⁾という。エニードは大佐の前ではタバコを吸っていることを隠し、やがて大佐と結婚することになる女性である²⁷⁾。

エニードのドレスは、次のようである。

第一のドレスはモーヴ色のスポット模様のある白いピケで、黄色いシルクのヴェストと対照的である(図3中央)。次のドレスはピンクと白のストライプのクレポンのスカートに模様織の白いモスリンのボディスであり、クレポンのストラップがついて黒いリボンで結ばれている。

イヴニングドレスはショットシルクの上に繊細な緑のゴーズからなっている。金の刺繍のウェストバンド、スマイルのリースのトリミングは衿開きのアウトラインをなし、短いパフスリーブの下には同じ花の枝が見えている。このドレスは鳥の装飾のドレスより芸術的で

魅力的である、と述べられている。

このように、エニードは、他の二人の「新しい女」に比べると、その衣裳において注目されていたことが明らかである。そのことは、結局、従来の価値観を持った大佐と結婚するという行為によって「新しい女」からの転換を示しているといえ、そのような女性にふさわしいドレスがデザインされたといえよう。

(4) レディ・ウォーグレイヴ

伝統的な優雅さを持っているレディ・ウォーグレイヴは、レースの衿のついたクロークの下に襟元にスカーフ状の飾りがあるドレスを用い、小さなボネットを被っている(図10)。威厳のあるスタイルは、その役割を十分にあらわすものであるといえる。レディ・ウォーグレイヴは、メイドとして躰をしているマージェリーが甥のジェラルドと結婚すると聞き、階級の違いを述べて反対をするが最後には二人の結婚を認め、新しい考えを受け入れる結果となったのである。

4. ファッションとの関わり

それでは舞台衣裳と当時のファッションとの関わりについて考えてみたい。

まず、作品中に流行のドレスメーカーの名称が登場している。これは観客が知っている名称をあげることによって、より身近な印象を与えている。1幕でお茶のために別室に退場した女性たちの会話が聞こえてくる場面で、ドレスメーカーの名があげられている。それらは、“Peter Robinson”, “Swan and Edgar”,



図10. レディ・ウォーグレイヴ

The Illustrated London News, Sept. 8, 1894

“Stagg and Mantle”であると記されている²⁸⁾。これらのドレスメーカーは、当時の婦人雑誌にたくさんの広告を載せていることが明らかとなった(図11)。

また、前述のように、舞台衣裳を手がけたドレスメーカーは、観客の共感を得るために登場人物の役柄を理解し、それぞれにふさわしいデザインを行っていた。観客は舞台のドレスに注目し、そこから最新の情報を得ていたのである。

このことは、『クイーン』に次のように述べられている²⁹⁾。

つぎのガウンを選ぶときに、舞台という役に立つ忠告を受けるのであれば、失敗するかもしれません。(中略)もし望むならば、コメディ・シアターで上演されている“The New Woman”で着られた衣裳を詳細に学ぶことはよいことです。そこでは、New Woman と Woman が繊細な衣裳芸術において、等しく魅力的な達人であることがはっきりと述べられ、それによって安心させられるかもしれません。

このように、ファッションの情報が舞台から得られることを雑誌の記事が示している。舞台衣裳はドレスメーカーにとっては格好の宣伝であったので、力を注いで取り組んでいたのである。その結果、それらの衣裳が記事として取り上げられ、評価されることになっ

たのであろう。

つぎに、シルヴェスター夫人の詰め物をした鳥の装飾のドレスについてみていきたい。

『スケッチ』では、次のように批評している³⁰⁾。

それはオリジナリティと効果に関しては賞賛に値する。しかし私にとってはそれはファッションの追従者の何人かのむごい軽率な行為の痛ましい例である。また、害のない羽のついた生き物の体を帽子やボネットに飾っているのは分別のない、悪いことである。それらは死んだときよりも生きていたときの方が美しいからである。

さらに、このような流行がイヴニングドレスに続くならば、「女性たちがこのような殺戮に対して抵抗し、立ち上がるときが来ている」という。

『クイーン』では「しかしこの悪趣味は魅力的なので、我々は金のシルクの流れるようなエレガンスを賞賛せずにはいられない。」³¹⁾と述べている。

このような鳥の装飾は、1895年1月に初演されたオスカー・ワイルドの喜劇『理想の夫』にもみられる。女山師として登場するチェヴリー夫人は、ツバメの装飾のついたイヴニングドレスを着てパーティに現れる(図12)。前のボディと背中にツバメがとまり、さらにスカートにも空を飛ぶツバメが装飾されている。このドレスについて、『スケッチ』は前述の意見と同様に「野蛮で不快である」といい、「女性たちがこの



図11. ドレスメーカーの広告

- a. Peter Robinson *Lady's Pictorial*, April 1893.
b. Swan and Edgar *The Queen*, Oct. 1894.



図12. チェヴリー夫人 ワイルド『理想の夫』より
The Queen, Jan. 12, 1895

19世紀末イギリスの演劇 *The New Woman* にみる「新しい女」

模倣をやめることによって不要な殺戮に反対の意を示してほしい」と続けている³²⁾。

また、『クイーン』では、「羽根とファッション」と題した論説が載り、「帽子に飾る羽根を手に入れるために、鳥を殺戮することについて反対することが望ましい」とのセルボーン・ソサエティの見解を述べている³³⁾。

以上のように、舞台衣裳は多くの人々に注目されることが目的であるため、当時のファッションをいかに取り入れ、さらに新しい提案をしていくか、ということが課題であった。とりわけ本作品のような世間に注目されている「新しい女」がテーマであれば、登場人物の台詞とファッションとが一体化されて、観客にそれぞれの人物のイメージを与えることが主眼となる。すなわち、舞台上で繰り広げられるストーリーとともに衣裳の表現が重要であることは、多くの雑誌の批評により明らかであるといえよう。

5. 結論—「新しい女」を表すもの

これまでみてきた結果、「新しい女」の特徴を本作品のなかからまとめてみたい。

まず、新しい生き方を目指した女性たちの特徴は、「仕事をする」、「精神的な愛を求める」、「料理をしない」、「ドアの鍵を持って自由に行動する」、「タバコを主義のために吸う」ことであるといえよう。さらに本作品では描かれていないが、「自転車に乗る」とことと合理服を着ることも「新しい女」にとっては重要な要素である。『スケッチ』には、合理服を着てタバコを吸っている「新しい女」のタイトルが「新しいアマゾンと古い対応策」と名づけられている。そこではニッカーズやトラウザーズ、ゲートルズの名を持つ3人の女性が自分たちの服装の正当性を主張している図が載っている(図13)。このような批判的な挿絵は『スケッチ』には珍しいが、本作品で明らかになった「新しい女」たちの主張がさまざまな機会にとりあげられていることが明らかである。そのなかでもタバコを吸うことは、自転車に乗る女性と同様に注目されるものであったといえよう。

さらに、本作品のなかで「新しい女」の特徴的な衣裳は、「筒状のスカートとカットウェイ・コート」であった。作品中では合理服のような進歩的なスタイルではなく、テラーメイドのコートを着ていることで「新しい女」であることを示していることになる。この時期にはテラーメイドの衣服はそれほど目新しい



図13. 「新しいアマゾンと古い対応策」

The Sketch, Oct. 10, 1894

ものではなく、かなり一般的に受け入れられていたことは、多くのドレスメーカーの広告により明らかである(図11a)。しかし、テラーメイドの衣服は、他の伝統的なドレスに比べて女性の解放を目指す特別の主張をもった装いとしても認識されていたことが、本作品の衣裳からも理解できる。

また、人目を引く最新流行のドレスを着装することも「新しい女」の一つの表現である。シルヴェスター夫人の鳥の装飾のドレスは、ワイルドの喜劇のチェヴリー夫人と同様である。ワイルドの作品は本作品より4カ月後の上演であるが、女山師であるチェヴリー夫人の性格をあらわすドレスであることは明らかである。したがって、奇抜な意匠は、どちらかといえば伝統的な装いから外れて、ある意味で挑戦的な態度を示すものであるといえるのではないだろうか。

以上のように、*The New Woman* の劇の分析によって「新しい女」の意識を明らかにすることができたと思われる。そして「新しい女」は彼女たちの行動と新しい衣裳とによって、その地位を確立していったのである。

本論文は2006年5月27日、第58回日本家政学会大会における口頭発表「舞台衣裳にみる19世紀末イギリスの *New Woman*」に加筆したものである。

また、科学研究費(基盤研究16500485)「服飾にお

けるジェンダーの比較文化的研究」の研究成果の一部である。

引用文献

- 1) 以下の文献にこれらの内容が詳述されている。川本静子：『〈新しい女たち〉の世紀末』，みすず書房，東京，7-30 (1999)；武田美保子：『〈新しい女〉の系譜—ジェンダーの言説と表象』，彩流社，東京，17-31 (2003)；Richardson, A., and Willis, C.: *The New Woman in Fiction and in Fact*, Palgrave, London, 13-25 (2001)
- 2) Linton, E. L.: The Girl of the Period, *The Saturday Review*, March 14, 1868, Electric. Text Research Center, University of Minneapolis, MN (2002) (The girl of the period) ...dyes her hair and paints her face, ...whose sole idea of life is plenty of fun and luxury; and whose dress is the object of such thought and intellect as she possesses. Her main endeavour in this is to outvie her neighbours in the extravagance of fashion.
- 3) 「新しい女」が定着する前には「野蛮な女」，「アマゾン」，「余った女たち」などが評論や作品のタイトルに用いられていた。Grand, S.: The New Aspects of the Woman Question, *North American Review*, 158, March 270-276 (1894) グランドはこの論の中で the new woman の言葉を使っている。Ouida: The New Woman, *North American Review*, 158, May, 610-619 (1894) ウィーダは反フェミニストの立場からこの論を書いている。
- 4) *Punch, or the London Charivari*, April 28, 194 (1894) この鍵については，後掲の論文では，当時の代表的な女性作家ジョージ・エジャトンの『キーノーツ Keynotes』を指す鍵であるというが，「ドアの鍵」を象徴しているとも受け取れる。Richardson, A., and Willis, C.: *op. cit.*, 20
- 5) *Punch, op. cit.*, 252
- 6) *ibid.*, 111
- 7) Grundy, S.: The New Woman, *The New Woman and Other Emancipated Plays* (ed. by Jean Chothia), Oxford University Press, New York (1998)
- 8) *The Sketch*, Oct. 17, 623 (1894)
It is a play to see, and has added a fillip of interest to the rather dull topic of the "New Woman," a theme which pursues us relentlessly in magazines and newspapers, and forms a topic of conversation at many dinner tables—more's the pity.
- 9) *The Illustrated London News*, Sept. 8, 206 (1894)
- 10) *Lady's Pictorial*, Sept. 8, 318 (1894)
- 11) Richardson, A.: *op. cit.*, 13, 64. ここでは自転車，喫煙，テニスが「新しい女」の社会的な特徴と説明されている。Grundy, S.: *op. cit.*, 270 (J. Chothia 解説)，ドアの鍵とタバコは男性の習慣であるといい，これに自転車を加えて「新しい女」の象徴としている。自転車服は以下の論文を参照されたい。拙著：19世紀後半の女性の脚衣—ブルーマーから自転車服へ—，服飾美学，18, 115-134 (1988)
- 12) Grundy, S.: *op. cit.*, 16
VICTORIA: A woman has just as much right to a latchkey as a man.
ENID: But a man has no right to a latchkey.
VICTORIA: That's ridiculous!
ENID: I admit that a woman has just as much right to come home with the milk as a man.
- 13) *ibid.*, 5
SYLVESTER: Her theory is, that girls should be boys, and maids should be young men. Goes in for latchkeys and that sort of thing.
COLONEL: Why can't a woman be content to be a woman? What does she want to make a beastly man of herself for?
SYLVESTER: But my wife isn't a woman.
COLONEL: None of them are, my boy. A woman, who is a woman, doesn't want to be anything else. These people are a sex of their own, Sylvester. They have invented a new gender.
- 14) *ibid.*, 26
I'm only Mrs. Sylvester's husband.
- 15) *ibid.*, 29
VICTORIA: Have you a latchkey yet?
MARGERY: Oh, yes!
ENID: Margery, you shock me!
MARGERY: Well, you're easily shocked!
VICTORIA: You have a latchkey? (*Triumphantly*)
MARGERY: (*simply*) Yes, we have a latchkey!
BOTH (*in different tones*): We?
- 16) *ibid.*, 28
VICTORIA: (*and produces a cigarette case*) Do you mind tobacco?
SYLVESTER: Not at all. I like it.
VICTORIA: Will you join me? (*Offers case*)
MARGERY: Thank you, I can't smoke.
VICTORIA: Then you should learn at once. (*Put a cigarette in her mouth*)
Could you oblige me with a light? (*Sylvester strikes a match*) Thanks. (*Lights up at the wrong end of a gold-tipped cigarette.*)
MARGERY: Do you like smoking?
VICTORIA: No, but I smoke on principle!
SYLVESTER: On the wrong principle!
VICTORIA: I beg your pardon. Men smoke cigarettes.
SYLVESTER: Yes, but they light them at the other end. *Victoria takes the cigarette out of her mouth and looks at it. Margery and Sylvester burst out laughing. She throws it away viciously.*
- 17) *ibid.*, 30
- 18) *ibid.*, 17
COLONEL: Everything's New nowadays! We have a New Art—

19世紀末イギリスの演劇 *The New Woman* にみる「新しい女」

- ENID: A New Journalism—
 VICTORIA: A New Political Economy—
 DOCTOR: A New Morality—
 COLONEL: A New Sex!
- 19) *ibid.*, 51
 You call yourself a New Woman—you're not New at all. You're just as old as Eve.
- 20) *ibid.*, 18. They want a husband.
- 21) *ibid.*, 9
 SYLVESTER: I shall be home to dinner, though.
 MRS. SYLVESTER: Oh, dear, I wish I had known that. There's only mutton.
 SYLVESTER: The same mutton?
 MRS. SYLVESTER: What do you mean by same?
 SYLVESTER: I mean the mutton I had yesterday.
- 22) *ibid.*, 10
 The ancient regarded his wife as a slave, the modern regards her as a cook.
- 23) *Lady's Pictorial*, Sept. 8, 318 (1894)
- 24) 服飾の記述は、以下の文献による。 *The Queen*, Sept. 15, 454 (1894); *The Sketch*, Sept. 12, 386 (1894)
- 25) Byrde, P.: *Nineteenth Century Fashion*, B. T. Batsford Limited, London, 74 (1992); *The Lady*, May 27, 403 (1886)
 コルセットを用いないティー・ガウンは、1889年までに家庭での女主人の衣装となり、また、マタニティ・

- ドレスとしても用いられていた、と記されている。
- 26) Grundy, S.: *op. cit.*, 31
 I've just been ordering my gown!
- 27) *ibid.*, 56
- 28) *ibid.*, 18
- 29) *The Queen*, Sept. 15, 454 (1894)
 (i)f she do not consult the only oracle now in working order—the stage. ...This is a good reason, if any be wanted, for studying in some detail the costumes worn in "The New Woman" at the Comedy Theatre. And here it may be reassuring to state that in the delicate art of gownery the New Woman and the Woman are equally charming adepts.
- 30) *The Sketch*, Sept. 12, 386 (1894)
 As far as originality and effectiveness are concerned, this dress, of course, deserves all praise; but to me it is a painful example of the cruel thoughtlessness of some of Fashion's followers. It is bad enough, in all conscience, to see hats and bonnets decorated with the corpses of the harmless feathered creatures, which are so much more beautiful in their life than in their death:
- 31) *The Queen*, Sept. 15, 454 (1894)
- 32) *The Sketch*, Jan. 9, 541 (1895)
- 33) *The Queen*, Oct. 20, 652 (1894)